

令和6年度 第1回白馬高等学校学校運営協議会 議事録(概要)

1 日 時 令和6年(2024年)4月22日(月) 9時30分～11時30分

2 場 所 白馬村役場 201・202 会議室

3 出席者 委員 14 名 以下敬称略

- ・相沢さつき(同窓会副会長)
- ・武田彰代(大町市立美麻小中学校講師 元白馬村教育委員長)
- ・太田伸子(白馬村議会議長)
- ・柴田友造(小谷村議会副議長)
- ・草本朋子(白馬インターナショナルスクール理事長)
- ・笹川陽子(白馬高等学校PTA、スキー部後援会役員)
- ・白戸 洋(松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科教授)
- ・中村和彦(白馬村立中学校長)
- ・小林かおる(小谷村立中学校長) ※新
- ・丸山俊郎(白馬村長)
- ・中村義明(小谷村長)
- ・松澤 泉(白馬山麓事務組合事務局長)
- ・小林雄一(白馬高等学校長) ※新
- 欠席委員・富原玲奈(シェラリゾート白馬代表取締役)

その他の出席者

- ・佐野浩一郎(高校教育課高校再編推進室室長)
- ・井出敦(高校教育課高校再編推進室主幹指導主事)
- ・土橋邦彦(高校教育課高校再編推進室主任指導主事)
- ・白馬村・小谷村副村長、白馬村・小谷村教育課長
- ・白馬山麓事務組合白馬高校支援係局長補佐、主査、白馬高校魅力化コーディネーター
- ・白馬高等学校教頭、事務長

4 次 第

(1) 開会の言葉(藤森要白馬高校教頭)

(2) 長野県教育委員会挨拶(佐野浩一郎高校教育課高校再編推進室室長)

- 平成 28 年に設置された白馬高校運営協議会、今年で9年目。ここ2年間の学校運営協議会は大きな転換期。委員の増員を求める要望が出され、学校運営協議会規則を改正。2つのワーキンググループを設置し、活発な議論が行われた。委員一人ひとりが学校及び支援係が行う生徒募集や中学校訪問に同行し、中学生や保護者に、直接白馬高校の魅力を説明することができた。
- 年度新たに白馬高校では55名の生徒を迎えた。国際観光科は、平成31年度以来、募集定員を満たす生徒が入学。県外生が24名と大幅に増加。前年度の活発な生徒募集活動の成果であると認識している。今年度入学の55名が、白馬高校に入学して本当に良かったと思いながら卒業してもらいたい。
- 教育委員会も白馬高校の取り組みに対し非常に注視している。今後は、生徒や保護者の立場になって考え、特性を持った生徒の受け入れ体制、インクルーシブ教育についても考えてもらったらどうか、という提言が出ている。機会ある時に、検討してもらいたい。
- 学校運営協議会は、県立高校である白馬高校1校のみの取り組み。学校、地域、県のトライアングルで学校をしっかり支えていくために、真摯に向き合っていきたい。白馬高校の今後の発展のために、有意義で活発な議論が行われることを期待している。

(3) 学校長挨拶(小林雄一白馬高等学校長)

- 令和元年度から昨年度まで5年間、生徒数の減少が続いていたが、今年度在籍生徒数は昨年度より

5名増え、141名。今年度55名の新入生は高校での学習、部活動、生徒会活動など、それぞれ取り組みを始めた。

- 白馬高校は、地域をはじめ保護者、同窓会などの支援を受け、教員も生徒も活力と笑顔に溢れる明るい雰囲気のある学校であると感じている。生徒一人ひとりを大切にしたい安心、安全で魅力ある学校づくりを進めていきたい。
- 本校の特徴的な取り組みや部活動の様子、様々な行事において生徒が生き生きと活動する姿など、学校としてもより多くの方に伝えていく必要があると感じている。今年度も運営協議会を核として、白馬村、小谷村両地域の力を借りながら、教育活動の取り組みを進めていきたい。

(4) 委員の自己紹介（略）

会長・副会長選任

○互選により、白戸委員を会長に、武田委員を副会長に選出。全員一致で承認。

(5) 審議事項

＜白戸会長＞

○昨年度までのワーキンググループを通していろいろな取り組みを進めてきた。その成果が出てきた。まだ様々な課題があるが、今後も前向きに両村、県と一緒に、取り組みを進めていきたい。

◇学校より現状報告と学校経営方針・組織編成・教育課程についての説明・提案

＜小林校長＞

○P6の1、在籍生徒数推移。今年度は昨年度より5名増の141名。今年度の特徴としては、白馬中・小谷中以外の12区の中学校からの入学者が昨年度13名から2名に減少した点があげられる。国際観光科は、県外、全国からの入学者が昨年度10名から24名と大幅に増加。

○P7の4、今年度入学者の個別出身地別の内訳。入学者全体における小谷中・白馬中を含む12区の中学校出身の生徒の割合は減少している。

○P8の5、在籍生徒数。今年度入学者の男女比率は普通科が男子71%、女子29%、国際観光科が男子61%、女子39%。1学年全体では男子64%、女子36%。今年度入学生は他学年に比べ、男子の割合が高いと言える。

○P9の7、寮生・下宿生について。今年度全学年合わせて、寮生は41名、下宿生は5名。

○P9の8、学校説明、相談会等の日程。

※7月27日(土)体験入学

※9月、10月に学校説明会、公開授業

※白馬中学校、小谷中学校等を中心に、中学校への訪問も検討。

○P10(5)地域みらい留学、対面合同説明会、オンライン説明会、(6)大都市圏での相談会の日程。

○P10の9、今年度に計画している主な取り組み。(1)高校生ホテル～(7)までの取り組みに加え、(10)国際交流、(11)グローバル講演会を計画。

○P12は、昨年度(令和5年度)卒業生進路状況。今年度は立教大学へも一般入試で合格。四年制大学進学者は14名。8名が地元企業等に就職。

○1学校教育目標、2目指す学校像、3育成する生徒像、4中長期的な重点目標は、昨年度と同様の取り組みを進める。5の重点目標は、生徒募集と学校教育活動の充実、魅力化推進を掲げる。

○生徒募集は、白馬高校支援係と協働。スクールカウンセラーや特別支援学校、外部機関と連携を進め、一人ひとりにきめ細かな支援を行っていききたい。

○中学校等の授業や校外活動における交流推進も引き続き行っていく。将来的には、カリキュラムの面でも連携し、地域の子どもたちが白馬・小谷地域で学びを継続する必然性を感じられるような仕組みと中身を整えていく。

○国際交流は、ニュージーランド短期外国研修やシンガポールの高校生との交流などを計画。

○P16、組織編成に大きな変更はなし。

○P17、18、教育課程表。新教育課程になり3年目、今年度全ての学年で教育課程が揃う。普通科でも国際観光科寄りの、国際観光科でも普通科寄りの科目が進路に合わせて選択できるようにしている。

<白戸会長> 意見や質問の有無を確認。

<丸山委員>

○普通科の人数が伸び悩んでいることや寮や下宿先の確保などの課題がある。県ともしっかり連携を取りながら進めていきたいと両村ともに思っている。

<中村(義)委員>

○P 6 の「平成 28 年度からの出身地別入学者の推移」について。国際観光科のグラフを見ると、R 2 ～ 4 年の入学者が減っている。これはコロナ禍の時に募集活動ができなかったためととれる。この時の募集ができていれば、三次再編に対する 160 名という条件がクリアできたと言える。今後は寮や下宿の問題などに広がっていくということを全体で共有する必要がある。

<佐野室長>

○令和 5 年度を初年度として、再編に関する基準を適用していくと公表していたが、教育委員会定例会において、その再編基準を一定期間留保するということが決定。従って、160 名という数値を 2 年連続した場合はそれに該当するということでやってきたわけだが、一旦はここで留保となる。再編基準に該当することはないということで確認をお願いしたい。

<草本委員>

○文部科学省の D X への申請はどうなったのか。

<小林校長>

○申請が通り、対象校となった。環境整備や効果的な取り組み、使用方法など検討している。

<柴田委員>

○国際観光科の生徒たちはどのような傾向があるか。

<松澤局長>

○特に女子生徒は活発、元気がよい、行動的な生徒がいる印象。全体的には、白馬村という地域に魅力を感じている、関東圏の出身、地域みらい留学を見ているなどの点があげられる。

<白戸会長> 委員の承認を確認。

◇山麓事務組合より支援事業の内容及び予算についての説明・提案

<松澤局長>

○大きい変更はなし。新たに大下寮を配置。

○コーディネーターとして、本年度から白馬村の地域おこし協力隊を任用。

○存続・魅力化に係る予算について、寮の管理業務に対する予算が大きい。クラブ活動支援は、今までスークラブに委託として払っていたが、今後は保護者会に支援という形で補助を出していく。

○P21 パルハウスの運営方針。昨年度の報告から変更はなし。男子寮 20 名、大下寮は現在 4 名、女子 17 名、4 月から新入生を迎えて運営を開始。寮・みなし寮連絡会や学校との連絡調整を行って、情報共有をしながら、体制を整えていく。

○寮生の出身地について。今年度大きく違うのは、関西方面(京都、大阪)から来ていること。宮城や愛知からも来ていることから、全国的に広がってきている状況が見てとれる。「地域みらい留学」の影響が大きいと思う。県内生の出身地は、松本が多いが、南信からの入学も見られる状況。

○寮受け入れ体制の問題が出てくると思われる。大下寮で今年度 6 部屋、来年度は 10 部屋程度用意していく。令和 7 年度は、男子寮は 17 名程度までは受け入れ可能。女子寮は 10 名程度。合わせて 27 名程度は受け入れられる見込み。男女の比率が変わると、次のステップを考えなくてはならない。

○P25 基本的には 55 名程度の入学者があればよいが、70 名程度(普通科 30 名、国際観光科 40 名)を目標人数とする。募集活動は、昨年度同様。「地域みらい留学」のイベント、白馬高校での体験入学、学校説明会など。「地域みらい留学」では、オンライン説明会と対面合同説明会あり。今までと大きく違うのは、オンラインは土日等で行っていたものを全て平日の夜に実施予定。対面合同説明会は、大阪会場と東京会場のふたつ。独自開催は、昨年同様。

<白戸会長> 意見・質問の有無を確認。

<丸山委員>

○説明会の開催方法なども検討していかなければならないと思う。昨年と同じだと出身地等の偏りが生まれてくる可能性もある。

○前期、後期の人数の取り方なども、もう少し柔軟な対応ができるようになるとよい。

<白戸会長> 白馬山麓事務組合支援事業についての委員の承認を確認。

(6) 意見交換

<武田委員>

- 地元の子が白馬の魅力に気付けないのが一番問題。小学校、中学校で白馬の魅力を見出し、さらに高校でその魅力を外に発信する。そうした流れができれば、白馬でがんばっていこうという気持ちが出てくるのではないかなと思う。
- 美麻中学校の3年生が通信制を選択した生徒もいた。学力はあるけれど、「人と接することが苦しい」「自分のペースで勉強したい」という生徒が増えてきている。そういう子たちが学習できる身近な場所があればいいと思う。

<中村（和）委員>

- 白馬の子たちは白馬のことを当たり前に思っているの、良さになかなか気づけない。白馬を他の地域と比べる、あるいは一旦世の中を知った上で白馬を見る、というのが必要だと思う。中学校では、白馬のことだけを一生懸命勉強しようというのではなく、「視野を広げる」という意味合いをこめ、週1回新聞を使って世の中の状況を知る時間を設けている。世の中の状況、経済の動き、気候変動などに目を向けた上で、地元である白馬に立ち返る。その中で、「白馬はやはり世界的にもすごいところなんだ」ということに、子ども自らが気付いていける。そうした取り組みをしていかななくてはならないと感じている。
- 他の学校の様子を聞いても、通信制は今大人気。理由は「自分のペースで」というのが非常に大きい。今年も実際に、数名の生徒が通信に流れていった。「通える自信がない」、「集団で授業を卒業までやれるかどうか不安」、それであれば、「自分のペースで安心してできる通信に行った方がいい」と。一方で、学力がかなり厳しかった子でも、「白馬で頑張りたい」という子に対しては、3年生のうちから集団で勉強できるように少しずつ時間を増やしていった。なんとか高校で頑張れるようにしようと頑張っていた子も。中学校と高校との間で、支援の差にギャップがある。義務教育があまりにも手厚くなりすぎていて、高校に行くと、それが急に全部自分で責任を持ってやらなくてはならないという状況。中間的に、少し手厚く見たり、個別に対応したりしてもらえるとありがたい。昨年、中学校ではSSR「スペシャルサポートルーム」を設置。集団では授業できないけれど勉強はしたい、という子に対して個別に学びの場を保障するもの。そういう子たちがいきなり高校に行って、そうした場がなくなってしまうのは非常に苦しいだろうと思う。

<白戸会長>

- 地元の魅力というのは、やはり当たり前すぎてなかなか感じないもの。白馬・小谷出身の大学生の中でも、割と地元に戻るという子が多い。それはやはり、外に出て地元の魅力がわかったということだと思う。ただ、できれば住んでいるうちに魅力を感じさせたい。地元を知らないまま人生の選択をしていく、ということが多い気がする。高校と中学が連携する、あるいは、小学生ぐらいまで含めて、地元の魅力をどう実感してもらうのかを考えることも必要。
- ワーキンググループでの議論の中でも、多様な生徒が学べるような仕組みを作れないか、という意見があった。この運営協議会でも今後議論を続けていきたい。
- 全国的に、高校に入学する中学卒業生がかなり減ってきている事実がある。良い教育をしても生徒がいない、という状況があり、そこをどう乗り越えるかというのがやはりポイント。「外から受け入れる」という手もあるが、地域の子どもたちをどう育てるかという中で、白馬高校がどのような役割を果たせるか、という議論をしていく必要があると感じる。

<柴田委員>

- 令和7年度から交付金がない形になる。例えばスキーや環境教育などに重きを置き、切り口を変えて、もうあと5年間創生推進交付金にアタックするのはどうか。
- 村で白馬高校をつくる、という感覚で物ごとを考えた方がいいと思う。立教大学等に進学できる、というところを打ち出していくなどをして、村の一大事業として取り組んでいく必要があると思う。スキーも強豪の方だと思うし、方向性としてそういうことも並行して考えていくといいのではないかな。

<丸山委員>

- 交付金はぜひアタックしていくべきだと思う。
- 単位制というものを導入する話も出ている。自分の強みを伸ばしたいということであれば、例えばスキーや環境など、そういったものを単位制で授業に取り入れていく。交付金にアタックしていく上でも「こんな取り組みをしている」ということを客観的に見せられるのではないかなと感じている。

<中村(義)委員>

- いろんな可能性が残っていると思うので、取り組むべきだと思う。
- 県立高校であるため、村営という形で運営するのは、今のところ反対。やはり県立高校としてしっかりとしたものにしていかなければならないと思う。その中をどうやってブラッシュアップしていくかということだと思う。
- 美麻の人が意外とコミュニティー的に取り残されている感じも受けるので、美麻―白馬間の交通手段などにも、もう少し目を向けて、県も含めて、いろんな形で取り組んでいくことが必要。
- 国際観光科は、動けばある程度実績的なものが出る、ということがわかった。今後は地元から生徒を増やすことが大切。どのように地元が動いていくか提案をしてもらえばと思う。

<草本委員>

- 国際観光科が白馬・小谷を合わせて 11 名で普通科は大町を合わせて 10 人(白馬・小谷だと 8 人)。国際観光科、普通科ともに同じくらいの人数が志望してくれていたのか。

<小林校長>

- 国際観光科が若干多い志望者数だった。前期選抜では普通科 50%、国際観光科 75%という募集枠で今年度の入試は実施。前期選抜では、普通科が募集人員 20 名のところ受検者数が 7 名、合格者も 7 名。国際観光科は、30 名募集したところ、42 名の受検者。30 名(定員数)合格。後期選抜では、普通科 33 名募集中、受検者数 4 名。国際観光科は 10 名募集し受検者数 14 名、11 名合格。普通科の受検者数は 4 名、第 2 希望者も入れ 7 名が合格。

<草本委員>

- 国際観光科を受けた白馬村・小谷村出身の子で落ちた人がいるのかが気になった。全てを国際観光科にするわけにはいかないだろうが、もし国際観光科の方が人気で、地元の子が希望しているのに入学できない状況なのであれば、その辺りをどうにかできないかと思う。
- 寮の予算が目を引く。ひとり 178 万円かかっていることになるが、寮費はいくらなのか。

<松澤局長>

- 月々 55,000 円となっている。

<草本委員>

- 年間ひとり 60 万円ということになり、半分以上を村で補填していることになる。例えば、もう少し実際にかかる費用に見合うものを寮費として取ることは考えているのか。優秀だが寮費が出せない生徒に対しては、奨学金制度等を設けるとか。

<松澤局長>

- やり方によると思う。
- 全国の寮を見ると、「朝食を出さない」、「土日の食事を出さない」、「昼食を出さない」など、そういったやり方をしているところもある。
- 寮は、「学校の寮」であるため、宿直は先生が行い、昼間の管理を地元がやっている。
- 費用の面は、交付金などを使い、大体ひとり 5 万円ぐらいは村から出している。7 年度から交付金がなくなるので、1 人 14 万円ほどの負担。運営の仕方をちょっと見直さないといけないと思っている。

<草本委員>

- 白馬で学ぶためなら寮費を払うという人がたくさんいると思うので、もう少しうまく対応できると思う。

<丸山委員>

- 県の方で考えられる手立てや支援はあるか。

<佐野室長>

- 新たに木曽青峰高校と小諸高校でも全国募集を行うことになった。それに伴い、「住まい」ということに関する規定を作り始めている。白馬高校に関してもできることがあるのではないかと検討の段階。

<中村(義)委員>

- 交付金の関係で、何か事業等で新しい動きはあるか。

<松澤局長>

- 高校を核とした「人づくり・人の流れプロジェクト」という事業がある。例えば、高校 2 年生の時だけ東京から田舎の高校に留学し、在籍中の単位はそのまま使えるなど。島根県や他の町村では、観

光などで交付金を始めているところもある。

○18 歳まで地域で育てて地域に就職するような流れを作る、体制を整えることをプロジェクトとして起ち上げているところもある。そうしたところを参考に地域計画を作っていければいいと考えている。

○魅力化プロジェクトの計画ビジョンは他のところを参考にしながら作り始めている段階。ソフト案を作成し、関係者各位に見てもらおうと思っている。

<白戸会長>

○交付金などは国から自然に出てきたものを受けとる、というイメージだが、実際はそうでもない。

高校改革プログラムは、文科省にアプローチをして起ち上がった経緯があるし、大学の取り組みを文科省に持っていった結果、数億という交付金が出たケースもある。「そのぐらいのつもりでやる必要があるんだ」と心にとめるといいのではないかなと思う。

<相沢委員>

○高校生が、SDG s 関係で賞をとり、補助金が出たという話もあった。そうした方法で補助金を受け取るというのもありなのかなと思う。

○意外に白馬の魅力を分かっていない気もする。もっと白馬と小谷の両方で良さを伝え合っていければよい。例えば白馬高校のイベントを紹介するなど、「何気なく白馬高校を見せていく」、「オープンにしていこう」とよい気がする。

<笹川委員>

○地域の特色であるスキー部の活動もとても大切。白馬高校と白馬中学校がヨーロッパへ遠征した際、白馬スキークラブのコーチを通して、姉妹都市であるレッシ（オーストリア）で、マウンテンリゾートの環境についての施設を回り、トレーニングだけでなく、環境について一歩踏み込んだ体験をすることができた。今後もそうした活動を広く深く行っていけるような関係を、高校とスキークラブで築けるといいと思う。そうした活動をもっとPRし、白馬高校スキー部の部員数の確保につなげるのもいいと思う。

<白戸会長>

○1 億円というお金が市町村から出ている中で、「自分たちが白馬高校を支えている」ことに対して、両村の村民が理解するためのアプローチが必要だろうと思う。

○地元の人がより高校を支えてくれるようにするためには、①地元の子たちが地元で育っていく環境として機能すること、②白馬・小谷村にとって高校が役割を果たすことが大切。大学の世界でも、潰れていく大学は地元に見放された大学。地元の人が「いい学校だね」と言ってくれることがとても大事。そのために、「どうしたら地元が必要としてもらえるのか」、「高校としてその地域にどういう意義を見出すのか」を考えること。

○最大の広報は、生徒が育って、その子たちが「白馬に行ってよかった」と他所で言ってくれること。いい生徒を育て、「本当にいい学校だった」と言ってくれるようにすること。そのために、地域との関係も含めて、白馬高校での教育の充実がものすごく大事。

※委員の改正についての説明(中村(義)委員) 略

※白馬高等学校中間改修についての説明(小林校長) 略

(7) 閉会

<佐野室長>

○地域の魅力化は地域と連携していくことが大切。

○生徒の意欲や自主性などを伸ばし、キャリア教育等を行っていくために、学校関係者である我々ができることは仕組みづくりや環境を整えること。単位制の導入やカリキュラム作り、国際観光科であれば地域と連携したデュアルシステム、地域型中高一貫校(地元の中学校から地元高校に進学する人数に枠を設ける)、学年担任制など、いろいろな取り組みが考えられる。

○白馬高校は全国募集のパイオニア的存在である。今後も、連絡を密に取りながら、生徒たちのために一緒に議論を進めていきたいと思う。

以上で第一回学校運営協議会は終了。